

聖山寮のこと



渡 辺 英 一

聖山寮とはかつて同志社に存在していた寮の名前である。建物は今でも烏丸今出川を下った西側に、ペンキの色も褪せたまま朽ちかけた異人館といった有様でひっそりと残っている。以前の広々とした前庭も何日の間にか家が建ち並び、電車通りに面した土塀も荒れた。戦後久しく門柱に掛っていた「禁酒会館」という標札は近頃見え無いようだが矢張り今でも門として使われているのだろうか。現在は誰の所有でどんな人が住んでいるのか。時々電車の窓から見る度に、私の住んでいた頃が偲ばれ、さまざまな想いが脳裡をかすめていく。

私のここでの生活は昭和十二年から十六年までであったが、聖山寮そのものも私の退寮後間もなく閉寮となった。そして再開されることも無く今にいたっている。

聖山寮の正式な名称は同志社大学学生YMC A 聖山寮といい、同志社学Yメンバーによって自治的に運営された。現在と違い、その頃学校の寮としては神学生のための西寮とその他のにはアーモスト館・ハワイ寮ぐらいなもので、私は入学早々偶然の機会にあまり面倒もなく入寮出来た。当時学Yの顧問は経済学部黒田謙一先生で寮生とのつながりも深かったが、先生以外にも予科の速水藤助・二宮源兵・南石福二郎、女専の加藤謙爾といった

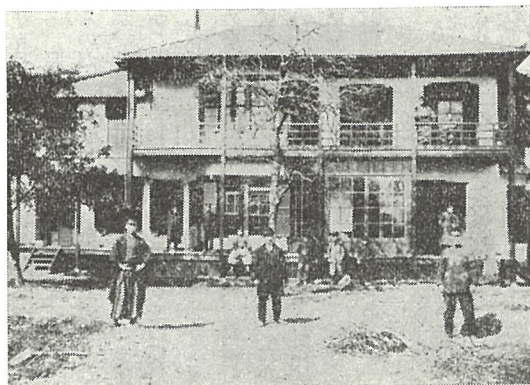
先生方が教師としてあるいは先輩として何かと寮の面倒をみて下さっていた。先輩の言によると、私の住んだ聖山寮は二代目の建物で寮の小母さんも今出川通りの北にあった初代聖山寮の小母さんの娘にあたるとの事であった。

寮には寮長、副寮長他数人の寮務委員がいたが二十人足らずのこじんまりとした寮として寮則も数カ条。その自由でのびのびした空気は、郷里の規則の厳しい中学校を出たばかりの私に解放感を強く味わわせてくれた。

寮として建てられたものではないため全て洋風で中にはマントルピース付きの部屋もあり、大きさはまちまちであった。寮生は一部屋に一人ないし二人で居住したが、年に一回位部屋換えをして不公平の無いようにした。

部屋ではベッドだったがスプリングのつかない木のベッドであった。その上に布団を敷くので朝起きて見ると何日も掛布団が半分以上床にずり落ち、たまりかねて裾の方を布団の上から綱を廻わしてベッドに括りつける工夫もしてみたが布団は落ちない代りに足が自由に動かせないことになった。

部屋の出入りには鍵を使い、また部屋の内



大正初期の聖山寮

側にも頑丈な錠が取り付けられてあり、用心は至極よかった。ある時など勢よく締めた拍子に内側の錠がかかり、どんなにしても開かず、おまけに二階だったため結局外から梯子に登りガラスを割って入った。もっともそれから皆用心して静かに扱ったので、生活マナーの向上と考えれば貴重な体験だったといえよう。

夕食後のひととき連れだって散歩に出るの

も日課のごとく、ある時は夕陽に赤い御所の中を砂利に下駄をききませながら歩き、話に熱中しているうちに何時の間にか顔も見えないほどになっていたのに驚いた事。また、ある時は一寸足を伸ばして出町の教文館で本を漁り、結局一番安い一つ星の岩波文庫を買ったまではよかったが帰る途中に紛失して慌てた事などもあった。寮生は皆読書好きで話題にも本のことが多くそれも刺激となって河合栄治郎の「第一学生々活」にある読書目録に従って読破する決心をしたこともあった。夜通し語り合ったり、読み終えて気がついたら朝になっていたという経験もこの寮で始めて得ることが出来た。

寮費は食事共で一カ月二十五円だったように思う。但し日曜日は寮の小母さんの休日で食事は各自で振るることになっていた。雨降りの日など外食の面倒さが身に沁みることもあったが、その反面、始めての京都生活の割にはいろいろな名物を知る機会にもなった。普段は近所のうどん屋・学生食堂等ですませたが、時には上級生に連れられて南禅寺の湯豆腐とか黄檗の普茶料理等珍しいものも教わった。

自由で自己の責任において営む寮ではあったが、毎夕の聖書輪読会と土曜日午後の土曜学校とはどちらも寮生の義務として行なわれていた。聖書輪読会は時には先生方を招いて聖書研究をすることもあり、寮生もこの時は神妙に講義を拝聴した。

土曜学校は同志社学Yの活動の一つで、教会学校の土曜版と言えるものである。寮の集会室で行なわれたので、寮生もそれに参加して児童の宗教教育に奉仕した訳である。主に近所の子供たちで集会室から隣の食堂にまではみ出すほどの盛況を見たこともあった。花の日礼拝には花を飾り病気で臥ている子供を見舞ったり、クリスマスには寮生がサンタクロースになって一緒に歌ったりもしたが、その子供たちも無事であれば皆いい父や母になっっていることだろう。

学Yの活動にはその他創立記念日と校祖昇天記念日とに行なわれる早天祈禱会への奉仕があった。これも主体的には寮生の活動で、それは街灯の代りに山道を照らす役目であった。寮生は午前四時出発し徒歩で若王子。そしてお墓の途中にある危い場所にそれぞれ提灯を高く掲げて立って待っている。暫くする

と暗闇の中から参会者がつきつぎと登ってくる。私たちは明るくなるまでそこに立っているのだった。若王子の参道は最近よくなったが、その頃の道はひどく歩き難くつまづき易かった。また危い場所もあり寮生の提灯も少しは役に立ったのではないだろうか。そのため寮には常に学Yのマークの入った提灯が保管されていたし、寮生も喜んで持ったが寒いには閉口した。特に厳寒二月の街灯代理は、京都の底冷えが骨身にこたえ立っている間中胸震いが止まらなかったものである。

私の学生時代は日支事変、第二次世界大戦と続く頃で寮の外にはかなり強い風が吹き始めていた。同志社の歴史に残る「チャペル籠城事件」といわれる学生ストライキも私が学校へ寮へ入った年の夏にあったし、日支事変の発端蘆溝橋事件も同じ頃に起きた。寮へ入った時の上級生から退寮する頃の下級生まで私を中心に前後七、八年の間の寮生にも戦死・戦病死あるいは戦災死と思ひもかけぬ災厄に遭い、伸びるべき芽の途中で摘みとられた者も少くはない。

冬休みを利用して北海道へスキーに行き吹

雪にまきこまれて危く遭難しかけたAさん、将来を嘱望されつつ惜しくも戦病死された牧師の卵のBさん、グリークラブで活躍し今もクローバーの重鎮Cさんら生きている方、亡くなった方全て皆私にとって尊敬すべき懐き先輩である。

寮のクリスマスはいつもすきやきパーティーで先生方を招いた。時には御家族の見える事もあったが、後日某先生のお嬢さんと結ばれた某さんの場合、このクリスマスパーティーがとりもつ縁だったのではないかと想像される。また何時の年か生煮えの好きな寮生とグループで鍋をつつく破目とられた先生の悲劇もあった。この先生はよく煮えた肉でないと召し上らない主義であったため、終始寮生の健啖振りを眺めるばかり。先生にはお気の毒なパーティーであった。

聖山寮閉寮のいきさつはそれ以前に退寮した私にはよく解らない。私の退寮は全く個人的なわがままな理由である。それまでの生活に対して何か心機一転してみたくなったのと卒業論文準備のため、より一そう読書に身を入れたと思うたのとで五年に亘る寮を出て

下宿に移った。大学当局が閉寮通告をしたのはそれから間もない時だったようである。理由も私はきいていないが、あるいは緊迫した時局に対し同志社としての姿勢を示す行動の一環だったのかも知れない。閉寮と同時に寮生はハワイ寮に転住させられた。

それ以後二十数年が過ぎた。あの聖山寮の建物は風雪に耐えて残っている。寮生のある者は嵐に吹き散らされたが途絶えた連絡も徐徐につきかけて来た。しかし今日までどこからも聖山寮復活の音がきかれないのは淋しい限りである。戦後のある時、かつての寮生の数人が会合したことがあった。その時の話題は閉寮前門柱は掛けられていた標札やピアノ等の什器がどこに行っているのかその所在を探索することについてであったがその結果はどうだったのだろう。

追憶は個人の感傷に過ぎず形あるものはいつか無くなってしまふ。

私も含め多くの人の青春の一時期を暖かく守りいたわり培ってくれた聖山寮。

あの建物の姿が消えるのもあまり遠い事ではないように思われる。